

お世話になりました ——恩に気づく

私たちは、人から物を借りたり、助けられたりしたときに「恩」を感じます。このような恩は気づきやすいものですが、身の回りにはたくさんの「気づきにくい恩」もあります。



納めの月

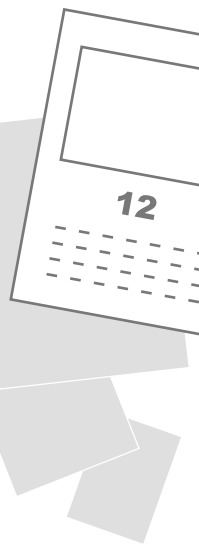
「今年も、また忙しい年の暮れがやってきたな」

大木さんは、つぶやきながら最後の一枚になったカレンダーを見やりました。

そこには、八日の「こと納め・針供養」をはじめ、十二月の行事が続いています。二十六日は官庁の御用納めであり、三十一日は「年越し」「大祓え」とありました。

「なるほど、十二月は今年一年を納める最後の月なんだな。」

確かに、この時期になると、借りていたものを返しておきたい気になる。今年もいろいろとお世話になった……」



借りたものは
返す

大木哲雄さんは、六十二歳。市役所の文化財に関する仕事をしていた関係で、定年退職後も歴史や民俗、自然環境などに関心を持っています。そのために図書館に通ったり、カルチャーセンターの講演を聴講したりする毎日を送っています。また、ボランティアで市の旧跡案内のガイド役も買っています。

十二月最初の日曜日の午後のことです。年末の大掃除をひかえて、庭の片づけをしていた大木さんは、インターホン

が鳴っているのに気がついて、玄関先に
回りました。

「こんにちは、健治です！」

と、大学生の甥が立っていました。

「やあ、いらっしやい」

「お借りしていた資料を返しに来まし
た。長い間、ありがとうございます」

「いやいや、そう急いで返してもらわな
くてもよかったのに。それより、役に
立ったかい？」

「ええ、おかげさまで卒論そつろんのメドも立ち
ました」

「それはよかった」

「それで父が、借りたものは年内に返し
しておくようにと言いました。それか
ら、これは母がお蔵暮さいぼにと……」

「それはありがとう。兄さんも姉さん

も、相変あひかわらず律義りちぎだな」

健治くんは、S大学の四年生で、卒業
論文のテーマに選んだ民俗文化について



の資料を、大木さんに借りていたので。

「資料をお借りしたお礼に、おじさんの家の大掃除でも手伝ってこいと言われました。何か手伝うことはありますか」

「それはちよūdょよかつた。少し運びたいものがあるんだが、重くてね。それに、庭の落ち葉も集めておきたいし」

そう言つて二人は、倉庫の片づけにかかりました。

片づけが一段落したところに、奥さんの泰子^{やすこ}さん（60歳）が買い物から帰つてきました。大木さんは泰子さんに事情を話しました。

「そうなの。わざわざご苦労さま。それにお歳暮までいただいて。立ち話もなんですから、お茶でも入れましょう。さあ、どうぞ」



熱いお茶は、大木さんと健治くんの冷え切つた体を温めてくれました。

「お兄さん、お姉さん、お元気？」と泰子さん。

「はい。ここのところ、年末の会合や買い物などで忙しいようです。

ところで、おじさん。年末にお歳暮を届けるというのは、やはり今年お世話になったお礼なんですか」

「そうだね、お世話になつた恩を返す気持ちの表れなんだろうね。

お歳暮は、今では人から人に贈るもの



になっているけれど、もともとは、年の
 変わり目に、先祖の霊を迎えて祀る御霊
 祭りのお供え物であつたらしいね。人間
 の生命のつながりと、それを生み出した
 源に感謝したものだと思うよ」

「へえー、『つながりに感謝する』です
 か。父はふだんから『借りた物は返せば
 済むが、人から受けた好意には、いつま
 でも感謝する心を忘れないように』と
 言っています。何か共通したものがあ
 るような気がしますが……」

「さすがは健治くんだな。実は、その言
 葉は、兄さんや私が子どもころに、母
 親、つまり健治くんのおばあちゃんがよ
 く言っていたことなんだよ。受けた恩は
 消えない、忘れてはいけないうってね」

「おじさんから資料を借りた恩も忘れ
 ちゃいけないですね」

「はは、そういうことかな。しかし、お
 ばあちゃん『してあげたことはすぐに
 忘れなさい』とも言っていた。恩を売る
 ようなことではいけないからね。いづれ

にしても、人とのつながりや恩に感謝する
ということは、健治くんにはぜひ受け
ついでほしいことだな」

「はい」

「そのうえ、気づきにくい恩だつてある
わけだしね」

「気づきにくい恩？ それはどういう意
味ですか」

「そうだね……。庭の落ち葉集めをしな
がら話そうか」



気づきにくい恩

再び庭に出て、落ち葉集めをしている
と、健治くんが聞いてきました。

「落ち葉がだいぶ溜まりましたね。ダイ
オキシンの[※]こともありませうから、最近
は、落ち葉も燃やせませぬ。結局、こ
の落ち葉はゴミにしかありませんか」

「落ち葉は焼いてしまうより堆肥にする
と、植物などを育てるのに役立つんだ。
そして、木が育つて繁^{しげ}った葉は酸素を出
して、私たちの生命を助けてくれる。そ
れが自然のサイクルだね」

「確かに、空気がなければほとんどの生

※ダイオキシン：物を低温で焼却したときなどに発生する毒性の強い物質。

物は生きていけない。それに人のからだのおよそ六〇〜七〇パーセントは水分だといわれていますから、水がなければ人間は生きていけないですね」

「そう、地球は水球と言われているように、まさに水は命の源だね。だから、私たちは空気や水はもちろん、目には見えない自然の恩恵おんけいを受けて生きているということになるんだ」

「自然の恩恵ですか。理屈では分かっても、ふだんは空気や水に恩を感じることもなんかありませんけど。僕ぼくだけでしょっか……」

「いやいや、健治くんだけじゃないよ。空気や水がなくて、よほど困ったという体験でもないかぎり、ふだんは、私も含かめて多くの人が自然の恩恵ということは考えないだろうね」

「そうなんです。空気も水も、あつてあたりまえですからね」

「そのとおりだね。人から世話になったり助けられたりした恩には、まだ気づきやすいけれども、それとは違って、自然や社会環境といったものから受けている恩には、なかなか気づきにくいものなんだね」

社会への恩返し

私たちは、いつも身の回りであつて、存在にも気づぎにくいものには、それが

どれほど大事なものであつても、あたりまえ、当然なことと思つて、恩を感じる心はなかなか生まれてこないようです。

気づぎにくい恩を意識して、何らかの形でお返ししようとする、例えば、ボランティアなど、社会への恩返しとなつて表れてきます。大木さんが率先して市のガイド役を引き受けているのも、こうした恩返しへの心の表れでした。

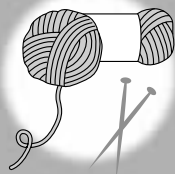
次に紹介するのは、恩返しする相手はわからないけれども、受けた恩になんとかして報いようとする人の話です。

——終戦の翌年、私は高等女学校の一年でした。

食糧難と着る物も満足にない日に、外国からララ物資といつて古着が送られてきました。一学級に五枚の割り当てがあり、その中の大人のコートを一枚いただくことができ、早速、自分で作り直し、大切に二年着て妹に譲りました。

どんな人が着ていらしたのかお礼を言いたいと思ひました。私は社会への恩返しを誓いました。

そして、編物教室をやめた三年前、毛糸の襟巻きを編んで千人の人にお返ししようと思ひ、ひと目、ひと目、棒針で編





んでいます。これまでに五百枚を編み上げ、施設などに三百枚を贈りました。

首に掛けると風に飛ばされることもなく、両手が自由に使えて非常に便利だと高齢者に喜ばれます。

次はどなたにあげようかしら。私は健康に感謝し、目標の千枚の達成に向かって楽しく今日も編んでいます。

(『毎日新聞』平成15年9月23日付読者投稿)

私たちは、着るもの、食べるものの、住む家をはじめ、身の回りの人々の働き、また文字とか、言葉とか芸術などの文化的なもののお陰で日々の生活を送っています。

また、祖先があり、社会があり、国があつて、この地球の上に存在しているのであり、さらに、これらすべてを包んでいる自然の働きという恩もあります。

このように、私たちは数多くの「恩」を受けていることに間違いないでしょう。

私たちは、自分が存在している、生きているということ自体が、そうした多くの恩恵に支えられているのだという自覚を持つことが大切ではないでしょうか。なぜなら、私たちの「いのち」は、何億年も以前から続いていなければ、ありえないからです。一度でも断絶だんぜつしていたら、私たちは存在しないのです。

そして、この「いのち」は、子や孫まごへと次代に伝えられていきます。社会全体



も地球そのものも、同じように次代につないでいかなければならないものです。

「自分が恩を受けたと思わない」「昔のことなど知らない」などと言うことはできないのではないのでしょうか。

なくなることで 気づく

「日が暮れて、急に寒くなってきたね。
このへんで終わりにしようか」

茶の間に戻った二人に、泰子さんが
コーヒーを出してくれました。

「おつかれさま。健治さんも、ごくろう
さま。寒かったですよ」

「ええ。でも、おじさんからいろいろな
話が聞きました。どうもありがとうござ
いました」

「いやいや、家の片づけを手伝っても
らって、こちらこそ助かったよ」

「ところで、僕なんか、ふだんは何気な

く生活しているの、恩に気づくことが
難しいように思うんですが」

「私もそうした心になるのは難しい。で
も、意識をしているといろいろと見えて
くるものなんだよ。」

例えば、今年の夏は、電力不足になる
というので、大々的に広く節電が呼びか
けられたわりに、日照時間の不足で、な
んとか切り抜けることができた。暑さに
弱い人にとっては過ごしやすい夏だつた
ね」

「ええ、僕にとつても、今年の夏は卒論
を書かなければならなかったので、涼し
くて助かりました」

「そうだろうね。そういう人もいるだろ
う。しかし、日照時間の不足のためにお
米は不作になって、関係の人たちには気

の毒だったね。もつと夏らしく照つてくれればよかったと思っている人だつて多いに違いない。

ところが、天気もんくに文句もんくを言つてみてもどうしようもない。むしろ夏の日照ひでりがなくなつて、はじめて大事なものだったことを知るきつかけになつたわけだね。

これを機会に、人間の暮らしは自然の恵みに支えられていることを見つめ直せば、あらためて自然に感謝できるようになると思うんだが、どうだろう」

「なるほど。暑いとか、寒いとか、不足を言うより、そこから学びとる姿勢が大事なんです。そう考えると、生活のいろいろなところで、恩を受けていることに気づくチャンスがある、ということですね」

「そのとおりだよ、健治くん。そのことを意識しながら暮らしていると、機会があるたびに『ありがたいな』という心がわいてくるようになる。それは私が経験していることだから間違いないよ」

「はい。僕も気づくチャンスを探してみます」

健治くんは、「お世話になりました。おじさんもおばさんも、よいお年を！」と挨拶あいさつをして、大木さん宅をあとにしました。



沈む夕日に感謝するTさん



使わないと衰えるのは、筋力や体力だけではありませ
ん。考える、気づくなどとい
う心の働き、つまり「心づかい」も、つ
ねにトレーニングしないと鈍くなつてい
きます。

恩について考え、自覚していくと、気
づきにくい恩や小さな恩にも気づき、感
謝の心がわいてきます。感謝の心は、道
徳の実行そのものです。そのためにも、
日々の繰り返しが大切ではないかと思
います。

愛知県に住むTさん（71歳）は、十年ほ
ど前、北九州にある南蔵院というお寺を
訪ねて、住職の林覚乗師の「夕日」とい
う書に出会いました。それは、

「正月に初日の出を拜む人は多いが、大
晦日の夕日を拜む人は少ない。毎年大晦
日の夕日を眺め、おてんとう様、今年一
年ありがとうございました、と感謝する
ことができる人、そういう人こそが、豊
かな人生を送ることができるのではない
でしょうか」

という内容でした。

Tさんは、その年の大晦日から夕日を
拜む決心をしました。孫といっしょに自
宅近くにある川の堤防に行き、沈む夕日
に向かって、この一年に受けたさまざま
な恩に対して感謝の心を込めて祈るので
す。

「初日の祈りは、ややもすると『今年一
年良い年であるように』という要求心が
起こりやすいものですが、一年最後の夕



目を拝むのは、一年の出来事に対して、ただ『ありがとうございます』の一念だけなのです」とTさん。

Tさんは、高血圧から自律神経じりつしんけいのバランスを崩し、一時期は、めまいや吐き気はきけに悩まされ、夜も眠れずに不安な日々を過ごしたことがあります。また「メニエール氏病」という病気にも悩まされました。

しかし、毎晩寝る前に、

「今日は一日、すばらしい日だった。今日、出会った人々は、すてきな人たちばかりだった。すべての人が幸せでありますように」

という祈りを繰り返すことで、心が安らぎ、やがて病も薄らいでいったという経験を持っています。



病気になったことで、自然の恩恵や周囲の人々からのお世話にいつそう気づき始めたTさんは、趣味の水墨画でハガキ絵を描き、出会った人たちや縁のある人の誕生日に送っています。少しでも恩返しができるば、という気持ちの表れです。現在ではその数も五千通以上になっています。

Tさんは言います。

「私の絵で皆さんが喜んでくださると、とてもうれしいです。一枚のハガキで社会貢献をさせていただき、それが私の目標です。たくさんの方々にお幸せになっ
ていただきたい、それが私の願いです」と。(モラロジー研究所刊『れいろう』平成14年7月号、平成15年8月号より)

新しい門出に

私たちが生活しているのは、どのような都会生活であっても、結局は地球・宇宙という自然の中から抜け出すことはできません。日常生活のことを少し考えてみただけでも、衣食住すべてのことが、多くの人や物の支えという「恩」によって成り立っていることに気づきます。

私たちは、自分自身が祖先以来の恩に気づくことから始めて、その恩返しを身近な周りの人々に広めていくことが大切でしょう。

一年が過ぎようとするこの時期、あらためて「恩」ということについて考えてみることは、新しい年を考えるためにも意義のあることではないでしょうか。